

## 意識を留めて心を流す

杉田多可雄

「首都圏のダイヤモンドのような町」と作家の打木むらじさんに言わしめたまち、飯能。東京のターミナル駅である池袋から四十分、首都五十キロ圏内にありながら入間川を中心にした清流と、江戸の町づくりとともに栄えた林業。きれいな川と深い緑の町はまさにきらりと首都近郊に光るまちだ。

私がここで育った頃は周辺の自然がそのまま遊び場だった。学校から帰るとカバンを家の中に放り込

み、体は家に入りもせずそのまま山や川に遊びに行った。川の中で泳いでいると足をちょんちょんとウグイやヤマメがつつく。山の中でチャンバラごっここの刀を作るためにホウの木を切って怒られたり、冬の朝早くメジロ取りに行く道すがらいモ畑でイモを拝借し、メジロ待ちの間に食うその焼きイモのうまさ！ けて私はガキ大将でも図抜けた腕白でもなかったが、この町に育てば、その程度のことには誰

でも経験することだ。同じく打木むらじさんの本の中に「よい景色を見るだけでおなかのくちくなるような子供……」とあるが、まさにこの町で育つ子はそうであつたと思う。私は飯能が好きだ。数日このまちを離れ、帰ってくるようなとき、飯能の町並みと山並みが見えてくるといまだに胸が熱くなる。きつこの自然の中にとっぷりと浸りながら育つた影響が大きいせいだと思つている。

飯能の周辺の山は共有林が多く、そこにゴルフ場の開発が押し寄せた。個人で持つていてもなにもならない共有林の権利が、世帯当たりかなりの高額で買つてくれるなら誰でも手放したくなる。一方都市計画区域外だつた奥地の地域は、格好の建て売り開発の対象となり山の谷間深くまで住宅が建つようになった。かくして林業の成りたなくなつた山は荒れてしまった。いつの間にか川は遊泳禁止となり子どもたちは学校のプール以外では泳げなくなった。観光客だけが川に入り、ゴミとたき火の跡を残して

ゆく。山にも川からも飯能の子どもたちは姿を消した。それでもなお緑濃く、川は黙々と流れている。

もつと子どもたちを飯能の自然の中になつぷりと浸けてやりたい。川の魚たちと遊ぶ、こそばゆいちよんちよんの感触、山の草をかき分けての「おつとばしっこ」（おにごっこ）とむせ返る草のにおい。その楽しさを体験すれば飯能が好きなき子が育つ、飯能が好きなき人が多く育てば育つほどこのまちはもつとすてきに輝きを増す。

そんな思いがつのつて「飯能緑の少年隊」を作つてから早くも十五年が経つてしまった。別に頑張つて支え続けたような感覚は全くない。好きなことをやらしてもらつている間に、さらさらと時間のほうが勝手に進み、十五年となつた、そんな感じだろうか。

自然であるということの大きな特徴の一つに「輝いている」というのがある。自然の中では何でも輝いている、比較が無くどれでもそれなりに輝いてい

る。草も木も石も皆それぞれに輝いている。普通の石も、ダイヤモンドも自然の中では同じ。違う位置付けをしたのは勝手に人がそう比較、認識したからにすぎない。いずれのものもすべて輝いている。比較がないということはそのものをあままに認識するということ。何かと比較をしたとたんに人は無意識のうちに位置づけを行う、より上とかより下とか右とか左とか。そしてそのとたんに本来の輝きが見えなくなってしまうようだ。

私にとって飯能緑の少年隊はほかと比較するものではなく、そのまんま丸ごと緑の少年隊だ。ボーイスカウトでもなく、スポーツ少年団でもなく、他の緑の少年団と競い合うのでもなく、ただただ私がそうしたいと思いつけた空間である。だから額に汗して支えているという自覚症状は全くない。

もちろん毎年運営上の障害のようなものはたくさん発生する、それはその面白さとして流してゆくだけ。障害に囚われ、とらわれた瞬間に面白さと捉え

られなくなる。たとえながあっても「おもしろいことになってきた」と捉えれば流せるようになる。そうすると「頑張る」が無くなり、肩の力が抜けてついでに「支えている」という思いもなくなってしまう。意識は留めて心は留めない、これが支える極意とでもいうのだろうか。おかげさまで今では子どもたちの直接の指導は若い人たちがやってくれるので、わたしはもっぱらビールでも飲みながら隊の活動を眺めている。

これからの緑の少年隊の夢。できることなら飯能周辺の林業を活性化させたい。かつては西川材として江戸の町づくりで栄えた林業は、木材そのものの需要がない中、あえぎながら何とか一部の情熱を持つた人々の手により、続いている。

木材本来の特徴である活人住宅の良さを分かってもらい（私は新建材だらけの今の住宅は殺人住宅と考えている）需要を広げ、林業も含めた新しい木材のサイクルができないだろうか？ そのサイクルの

一部に緑の少年隊が役に立つことができれば、ますます輝くまちづくりができる。

に開放たれている。

(飯能緑の少年隊事務局長)

輝く人、輝くまち、輝く地球、……ドアは一直線

## ともかく揺れるブランコ

鍋島 恵美

幼稚園という生活のなかに子どもたちがやってきた時、その新鮮さに、ワクワク・キラキラ心を踊らせ目を輝かせる子どもと共に、ドキドキ・オロオロ

目を伏せる子どもの姿も感じます。『支え合う』とは、どんなことなのか幼児とともにある生活から問い直してみようと思います。

